

## 8 異本病草紙に就いて

○林<sup>1)</sup> 美朗・野寄 理

およそ平安末期の十二世紀後半頃の成立とされている病草紙には、関戸家旧蔵・現東京国立博物館蔵の国宝病草紙や神戸・香雪美術館蔵の異本断簡の他に、「異疾之図」とも称される異本病草紙があり、またそれらとは全く別個に江戸末期の成立とされる、新撰病草紙と称されるものも伝存している。この中、関戸家旧蔵・現東京国立博物館蔵の国宝病草紙は、鎌倉初期を下らない頃の成立とされているものであり、十五図と数葉の断簡から構成され、佐野みどり氏によれば、それらは「病の多様性に対する興味」を主体とした、「当時の医師たち」による「病の症例集として集録」されたものであるとされている。もちろん、そこに見られる各症例は、多様性に富んだ、

実に興味深いものが多いのであるが、しかるに神戸・香雪美術館蔵の異本断簡の『小法師の幻覚を生ずる男』等から窺われ得る、精神医学的な「癲狂」の症例となると、むしろ異本病草紙の方に興味と関心をそえられる症例が多く収載されており、その書誌等の基礎的研究が待たれると思われるところである。

この異本病草紙の写本は、これまでに紹介されているものや、演者の管見に入ったものを合わせると、現在、計十本以上の存在が確認されており、それらは第一次本かと推測される、十三図から十七図のいわば略本系統と、第二次本かと推測される、大略三十五図前後のいわば広本系統の二系統に分類され得る。その殆んどは、江戸期の写本であるが、第一次本(略本)系統の大坂・武田科学振興財団の杏雨書屋所蔵本は、南北朝期頃の写本であると鑑定されているものであって、その意味ではそれら異本病草紙の成立も、或いはその頃にまで遡り得るのではないかと考えられるところのものと思われるのである。

本発表においては、そのような多種多様な症例の混在する異本病草紙を、まずは具体的な図の出入りを中心に

各諸本を対校することにより、各系統別に分類・整理し直し、その中のどれが第一次的・原初的なものであり、またどれが二次的・補助的なものであるのかを明らかにするための作業をすることから始めることにしようと思う。次に、その中の特に「癲狂」の症例に注目して、その典拠となったと思われるものを古記録や日記・物語・説話集等の類の各文献から渉獵し、それらとの関係の考察や、精神医学史(精神病史)的文脈の中にそれらを置き戻してみるという作業を進めてみることにしようと思う。特に第二次本かと推測される、広本系統の諸本の中には、露出狂といったような極めて珍しい症例も幾つか見られているのであり、同じく佐野氏によれば、この異本病草紙は「猟奇的な図様」や、「必要以上に性的な興味が強調され絵画化されている」ともされているところであるのである。そして、以上のような作業を通して、異本病草紙の成立とその特徴を更に詳しく検証し直し、その(精神)医学史上における意味といった点も、より細かに追究していくことにしようと思っている。またもしできるならば、同時代のものかと考えられている、地獄

草紙や餓鬼草紙といったいわゆる六道絵との関連等についても、合わせて言及してみる事ができればと考えている。

(1)札幌花園病院

(2)岐阜大学医学部神経科精神科